

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04497

研究課題名(和文) 教科学習と連携を図った食育の実践と評価 - 合科的・関連的な指導モデルの提示 -

研究課題名(英文) Practice and evaluation of Shokuiku related specifically to course subject learning: Proposal of an instruction model using a subject-related, subject-integrated approach

研究代表者

岸田 恵津 (KISHIDA, Etsu)

兵庫教育大学・学校教育研究科・教授

研究者番号：70214773

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、教科学習と連携を図った食育を実践、評価して、合科的・関連的な指導モデルを提示することである。関連的な指導として、国語と連携を図った食育実践の実態調査と実践を評価した。小学校3年生の国語「すがたをかえる大豆」の学習と同時期に総合的な学習の時間で豆腐作りを取り入れた食育活動を行った。その結果、伝統的な食べ物に対する関心に加え、国語の学習に対する関心・意欲を高め、説明文の内容の理解を促す可能性が示唆された。また、質問紙調査からも国語と関連付けた食育活動は、食育だけでなく、国語にも良好な効果があると認識されていることが示された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was the practice and evaluation of Shokuiku (food and nutrition education), with the objective of relating it to course subject learning, and the proposal of an instruction model that uses a related and integrative approach. We based our evaluation of the actual condition of Shokuiku practice on cooperative work with the Japanese-language department. As subject-related instruction, at approximately the same time as third-grade students read the story "The Changing Shape of Soy Beans" in their Japanese-language course textbook, a Shokuiku activity was conducted and students prepared tofu during their integrated studies period. Results suggest that the children gained not only an interest in traditional Japanese food but also a greater interest in and motivation to learn the Japanese language, as well as encouragement for understanding the contents of the explanatory textbook.

研究分野：食育・栄養教育，食生活学，調理科学

キーワード：食育 食に関する指導 教科学習 関連的な指導 国語

1. 研究開始当初の背景

(1) 教科学習と連携を図った食育実践の必要性と実践の課題

平成20年の学習指導要領総則では、食育は学校の教育活動全体で取り組むものとして位置付けられており、各教科、特別活動、総合的な学習の時間等における連携が重要である。教科で食育を扱う場合、教科の目標・内容によって次の3パターンがある。

I. 教科の目標・内容が食育と重なり、食育の基礎基本を教科内容として学ぶ時間となるもの(例 家庭科、体育科)

II. 教科内容に食育として学ばせたい内容が含まれるが、家庭科では扱わないもの。身近な食を教材として児童に自らの問題として考えさせる。(例 社会科)

III. 教科の目標や内容に食育として学ぶ内容は無いが、教科学習の内容理解を深めるため、また教科で学んだ内容を活かして、教科の発展学習として食育を位置付ける。(例 国語科、外国語活動)

これらの中で、IIとIIIも、多くの学校の食育全体計画に取り上げられているが、特にIIIについては、実践上の連携については曖昧であり、時間的制約や教科の枠を逸脱しないかとの懸念から形式的な学習で終わることも少なくない。また、教科学習に食育を連携させた場合の教育効果や有効性は明らかではない。

(2) 食育における合科的・関連的な指導の可能性

小学校指導要領総則には各教科等の連携を図った指導の効果を高めるため、合科的・関連的な指導を行うことができると規定されている。食育には幅広い内容が含まれるため、教科等を越えた総合化、また知識と生活との結び付きが重視される。したがって、連携を図る上で、合科的・関連的な指導が食育には有効で、学校現場の実態に即していると考えられた。

2. 研究の目的

前述のような背景を踏まえ、本研究では、教科学習を活かし、教科との連携を図った食育を実践、評価、検証し、食育実践の合科的・関連的な指導モデルを提示することを目的とした。具体的には、教科として国語科と社会科を取り上げ、教科と連携を図った食育実践の実態調査とそれを踏まえた食育実践を評価した。

3. 研究の方法

(1) 研究1 国語科と連携を図った食育実践の実態調査

K市全小学校(169校)を対象に、郵送法による質問紙調査を実施した。調査内容は、小学校3学年の国語科教材「すがたをかえる大豆」、「食べ物のひみつを教えます」と関連を図った食育の取組、食育活動の実施状況、

教師が考えている活動の効果等についてである。有効回答数は81(回収率48%)であった。

(2) 研究2 国語科「すがたをかえる大豆」と関連付けた食育の実践と評価

小学校3学年の国語科の教材「すがたをかえる大豆」と総合的な学習の時間(総合学習)における豆腐作りを取り入れた食育活動と関連を図った実践を行い、その効果を表1に示すようにK市立A校とB校で比較した。両校とも「すがたをかえる大豆」を8時間、総合学習での食育活動を2時間行った。2校間の違いは食育実践の指導時期であり、A校では国語科の当該単元の途中で総合学習を配置して関連的な指導を行った。

表1 国語科と総合的な学習の時間で関連を図った食育実践

	A校	B校
11月	[国語] すがたをかえる大豆 [総合学習(食育)] 豆腐作り ワークシート、アンケート	
12月	[国語] すがたをかえる大豆 ・担任教諭への質問紙調査	[国語] すがたをかえる大豆
3月		[総合学習(食育)] 豆腐作り ワークシート、アンケート ・担任教諭への質問紙調査

評価については、児童の振り返りワークシートの記述内容とアンケートの分析、並びに担任教諭への質問紙調査により行った。

(3) 研究3 社会科における食育実践の実態

食育研究実践の報告書並びに教科書、書籍等を資料として、実態を調べた。対象とした主な資料は次の通りである。

- ・文部科学省、「食に関する指導の手引 - 第一次改訂版」, 2010
 - ・兵庫県教育委員会、「食育ハンドブック」(2013)
 - ・藤本勇二, 社会と関連付けた食の授業とは、「学校給食」, 65巻10号, 51-53, 2014
 - ・藤本勇二編著, 「入門食育実践集」, 全国学校給食協会, 2015
 - ・文部科学省, 小学生用食育教材「たのしい食事つながる食育」, 2016
- 資料からの実態把握をもとに実践のあり方を考察した。

4. 研究成果

(1) 研究1 国語科と連携を図った食育実践の実態調査

授業の進め方の工夫として、約半数の学校で、給食献立表を用いて大豆・大豆加工食品の使用状況を調べる活動を取り入れ、学校給食を国語科の教材として活用していた。実施されている食育活動は、豆腐作り(実施率60%)が最も多く、次いできなこ作り(43%)であった。

これらの食育活動は、多くの学校では「国語科の教材に関連付けて食育を推進する」というねらいで行われており（回答率84%）、「国語科の単元理解を深めるため」をあげた学校は前者よりも少なかった（46%）。食育としての活動のねらいには、主に、大豆から様々な食品が作られていることを体験を通して理解すること、並びに、作る体験を通して食べ物に関する関心を広げることといった体験を通じた理解・関心の深まりがあげられていた。

児童に対する食育活動の効果として最も多く回答されていたのは、「大豆が身近な食品に加工され、食べられていることを確かめ実感することができた」という国語科と食育の両面に関するものであった。豆腐作りなど大豆の食品加工を体験学習に取り入れた学校からは、「すがたをかえる大豆」の内容理解が深まったことを効果として認識している割合が高く、結果的には国語科の単元内容の理解や学習への興味・関心、意欲の高まりにつながっているようであった。

したがって、国語科と関連を図った食育活動は食育の視点だけでなく、国語科にも良好な効果があると認識されており、国語科と食育の学習それぞれの目標の達成につながる可能性が示唆された。

(2) 研究2 国語科「すがたをかえる大豆」と関連付けた食育の実践と評価

児童へのアンケートによる評価

「とうふ作りは楽しかったですか」に対しては両校ともに95%以上の児童が「はい」と回答しており、興味・関心をもって楽しく取り組んだ活動ととらえられていた。「自分から進んでとりくむことができましたか」「みんなと協力して作ることができましたか」「むかしの人のちえやくふうがわかりましたか」については、学校間に有意差があり、「むかしの人のちえやくふうがわかりましたか」に対する「はい」の回答はA校が95%、B校で77%と差があり、国語科の学習との関連が示唆された。

振り返りワークシートによる評価

「思ったことや気がついたことをかきましよう」という記述内容を「体験」「気づき」「意欲」の3つに分類した。楽しかったことや味についての感想など「体験」についての記述は両校ともに約70%と同程度であり、印象に残る体験活動となったようである。「気づき」の内容で両校間に違いが見られたのは、昔の人の知恵や工夫、大豆の変身に関する記述で、A校の方が多かった。「また作りたい」といった「意欲」に関する記述もA校に多く、意欲・関心が高かった。

教員による評価

両校ともに食育活動の効果として、「食べ物の大切さに気づくことができた」「生産の喜びを感じることができた」などの食育の効果に加え、「大豆が豆腐になる過程を実際に

見ることにより、教科書に書かれている内容を読み取ることができた」「大豆を取り入れてきた昔の人の知恵や工夫を理解することができた」「学習意欲を高めることができた」などがあげられていた。これらより、食育活動が国語科の学習の補完になっていることが示唆された。

研究1と2より、国語科単元「すがたをかえる大豆」「食べ物のひみつを教えます」を教材としている多くの学校では、2つの単元と関連付けて、給食献立の活用や食品加工の体験学習を取り入れていること、食育の推進とともに、国語科の学習効果を高めていることが明らかになった。また、関連的な指導を行うことにより、食育だけでなく、国語科の目標の達成、さらに、学習に対する興味・関心・意欲を高め、学習が深まる可能性が示唆された。

(3) 研究3 社会科における食育実践の実態

質問紙による実態調査と実践を計画していたが、期間中に実施できなかった。方法に記載した資料等をもとに社会科における食育実践の実態を調べた。

社会科と食育は目標において重なりが少ないが、食育として学ばせたい内容が含まれており、身近な食を教材として、児童に自らの問題として考えさせることができる点で、食に関連付けた授業が可能である。食育と関連付けられる社会科の内容として次のものがあげられる。

3・4学年 地域社会の社会的事象（地域の生産や販売に関わっている人々の働き、地域の古い道具、文化財や年中行事 など）

5学年 わが国の国土や産業（食料生産、食料自給率 など）

6学年 国際理解、わが国の歴史

社会科と食育は、学習活動である方法においても重なることがある。例えば、日本人の主食である「米」については、5学年では食料生産の視点から、6学年では歴史的な視点から関心を持たせるとともに食に関する理解を深めることができる。兵庫県では、食育全体計画の5学年に、家庭科「米飯とみそ汁の調理」と関連付けた社会科、総合学習を記載している学校が多く、関連的な指導がよく実施されている。しかし、これらの関連的な指導の有効性について十分に評価されていないと考えられる。

(4) 合科的・関連的な指導のあり方

教科学習を活かした合科的・関連的な指導のあり方として、次のようなことが考えられる。

・連携のためには、食育全体計画の内容を全教職員が共通認識した上で実践にのぞむ。

・時間配当に比較的幅をもたせて対応できる総合学習を活用し、体験活動を取り入れた実感を伴う学習とする。

・食育のねらいを明確にし、広げすぎない。また、国語科等の教科と食育のねらいを意図的に関連付けて、実施内容・方法・時期を工夫する。

・栄養教諭など食の専門家や地域の人材・機関との連携を図る。

(5)今後の課題

国語科と食育との関連的な指導として、本研究では3学年の教材「すがたをかえる大豆」を取り上げて、国語科における食育実践の児童の学びや有効性を論じた。しかし、これらの効果は本教材に特徴的な結果である可能性もある。今後、他の教材や学年での実践や検討が必要である。

社会科と食育との連携においては、実践モデルを案出し、その評価を実施できなかった。社会科における食育実践の例は研究校の紀要等で多く報告されているが、教科指導の評価と食育の評価とのすり合わせが明確ではなく、課題が残されている。

また、合科的な指導による食育実践を提示することができなかった。合科的な指導は、低学年の生活科と学級活動を活用した食育で実践可能と考えられるので、今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計8件)

能瀬陽子, 岸田恵津, 栄養教諭の連携に関する活動の実施状況とその関連要因, 大阪国際大学・大阪国際大学短期大学部紀要国際研究論叢, 査読無, 31 巻 2 号, 2018, 207-218

吉川芳則, 説明的文章を批判的に読む授業を行うための初期段階の実践課題, 言語表現研究(兵庫教育大学言語表現学会), 査読無, 第34号, 2018, 1-13

岸田恵津, 今城安喜子, 増澤康男, 国語科関連を図った食育実践の実態:「すがたをかえる大豆」に関する質問紙調査より, 兵庫教育大学研究紀要, 査読無, 48 巻, 2016, 77-84

阿部一郎, 石井瑛之, 岩下真一郎, 南埜猛, 保岡拓摩, 渡邊幸太, 地域発展学習における教科書内容の地域教材化の検討, 地域の人・水・土に学び伝える, 査読無, 第4号, 2016, 23-37

渡邊幸太, 村越政美, 程琪, 南埜猛, 地域発展学習の系譜と東条川疏水, 地域の人・水・土に学び伝える, 査読無, 第3号, 2015, 66-77

[学会発表](計12件)

赤松利恵, 稲山貴代, 衛藤久美, 神戸美恵子, 岸田恵津, 学校における食育の評価はどうあるべきか~栄養教育研究会の活動を通して~, 第25回日本健康教育学会学術大会, 2016

今城安喜子, 岸田恵津, 増澤康男, 国語科

「すがたをかえる大豆」と連携させた食育の実践と評価, 日本教科教育学会第40回全国大会, 2014

[図書](計6件)

編者 日本健康教育学会 栄養教育研究会(赤松利恵, 岸田恵津, 他全7人), 学校における食育の評価実践ワークブック - 評価を考えた食育計画の作成 -, 健学社, 2017, 全32頁

吉川芳則, 実践に機能する理論の活用 説明的文章の批判的読みの授業づくりを例に, 全国大学国語教育学会編『国語科教育における理論と実践の統合』東洋館出版, 2018, 61-66

吉川芳則, 論理的思考力を育てる! 批判的読み(クリティカル・リーディング)の授業づくり 説明的文章の指導が変わる理論と方法, 明治図書, 2017, 全160頁

吉川芳則, 説明的文章の批判的読みの授業づくりの初期段階における要点, 原田智仁・關浩和編著『教科教育学研究の可能性を求めて』風間書房, 2017, 3-12

[その他](計3件)

神戸美恵子, 赤松利恵, 稲山貴代, 衛藤久美, 岸田恵津, 「学校における食育の評価」の実践に向けて - 平成27年度栄養教育研究会公開学習会の報告 -, 日本健康教育学会誌, 第24巻, 2016, 151-156

赤松利恵, 稲山貴代, 衛藤久美, 神戸美恵子, 岸田恵津, 望ましい食習慣の形成を目指した学校における食育の評価(提案書), 日本健康教育学会誌, 第23巻, 2015, 145-151

赤松利恵, 稲山貴代, 衛藤久美, 神戸美恵子, 岸田恵津, 望ましい食習慣の形成を評価する学校における食育の進め方(提案書), 日本健康教育学会誌, 第23巻, 2015, 152-161

6. 研究組織

(1)研究代表者

岸田 恵津(KISHIDA, Etsu)
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号: 70214773

(2)研究分担者

吉川 芳則(KIKKAWA, Yoshinori)
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号: 70432581

南埜 猛(MINAMINO, Takeshi)
兵庫教育大学・学校教育研究科・教授
研究者番号: 20273815